

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

平成知新館 3F-2(考古)に展示されている「古墳時代の銅鏡」について勉強してみよう。

日本人と銅鏡

日本人は鏡が好きです。ここでは古代の銅鏡のことなのですが…。神社の拝殿から本殿をのぞくと、祭壇に据えられた円い銅鏡が見えるかもしれません。現代でも神社にご神体として鏡が祀られることがあるのです。

日本列島に銅鏡が伝わったのは2000年余り前の弥生時代のことでした。中国には漢という強大な国家が存在し、銅鏡をはじめとするさまざまな青銅器が盛んに生産されていました。漢の銅鏡は海を越えて運ばれ九州北部の弥生時代の甕棺(土器でつくられた棺)などから出土します。しかし奈良県や京都府ではほとんど出土しません。そのころの近畿地方ではおもに銅鐸が製作され使われていました。

古墳時代になると鏡の時代がやってきます。とくに3世紀後半～4世紀頃、すなわち古墳時代前期には盛んに大陸から輸入されたり、国内で生産されたりしました。現代では古墳の重要度をその古墳の大きさとあわせて出土した銅鏡の枚数で評価します。「今度発掘された何々古墳からは三角縁神獣鏡が5面も出た(すごい!)」などという会話が研究者の間で交わされています。すなわち現代の考古学者も銅鏡が好きなのです。

3世紀半ばに邪馬台国が中国に派遣した使者も魏の皇帝に「お土産には是非銅鏡を下さい」と言っただけなのです。それは「汝の好物を給う(おまえの好きなものを与えよう)」として「銅鏡百枚」をもらっているからです(魏志倭人伝)。魏の人々は「都にはほかにも凄いものがたくさんあるのに、なぜ倭人(日本人)はわざわざ銅鏡を欲しがるのだろうか?」と思ったに違いありません。当時の中国では銅鏡が一番のお宝ではなかったようなのです。当時の倭人たちがどうして銅鏡を欲しがったのかは想像するしかありませんが、邪馬台国には銅鏡を用いる祭祀(祭や儀式)が存在し、そのために多くの鏡が必要だったからではないでしょうか。

下って20世紀には考古学者が盛んに銅鏡を研究しました。それは今も続いているのですが、その形や文様の研究は微に入り細に入り、ずいぶん深く検討されています。今回、平成知新館3階の「古墳時代の銅鏡」という特集陳列では京都国立博物館が所蔵するもの、またお預かりしているものの中から古墳出土の銅鏡30面余りを展示しています。

ここではそのうち2面の銅鏡を紹介します[写真1・2]。

写真1は兵庫県高砂市の牛谷という場所で江戸時代に出土した鏡です。天神山古墳と呼ばれるその古墳は現在消滅していますが、古墳時代前期の墓であったことは出土したこの鏡から分かります。縁の断面が三角形である三角縁神獣鏡で、直径は21.8cm、銅質も良く、文様や漢字の銘文もはっきりしています。中心にひもをかけるつまみを持ち、その周

内区(内区)には4個の小さな突起を90度ごとに配置していますが、その突起の間に4体の獣像と5体の神像、1本の傘松形図像がほぼ均等に表現されています。すなわち三角縁五神四獣鏡と呼ばれます。内区の外側には漢字の銘文帯があります。「君宜高官」の四字を飛び出させ、その間に「陳是作鏡甚大好上有神守及龍虎身有文章口銜巨古有聖人車(東)王父西王母渴飲玉淫飢食棗長相保」という銘文をいれています。その内容は神獣鏡によく記される吉祥句(おめでたい言葉)です。この鏡のよな上質の三角縁神獣鏡を邪馬台国の使者が魏から持ち帰った「銅鏡百枚」の一部だとする説があります。しかし中国大陸からは出土しませんので、日本列島内で漢文を良く知る工人によって作られたという説もあるなど製作地についての議論が分かれています。



写真1 重要美術品 《三角縁五神四獣鏡》 兵庫県・蓮教寺蔵

写真2は京都府向日市の恵美須山古墳から大正時代に出土した銅鏡。こちらは明らかに日本列島内で鑄造された鏡です。直径24.0cm。後漢時代の方格規矩四神鏡を写したものです。4世紀頃に近畿地方で製作されたものでしょう。内側の方形区画やアルファベットの「T・L・V」の文字のような幾何学文様は上手にまねています。ただし本来は玄武や朱雀・白虎や青龍といった方角を示す四神の像が表現されるはずなのに、そこには



写真2 重要文化財 《変形方格規矩鏡》 京都国立博物館蔵

渦巻き状の細い曲線を用いたほんやりした獣像が表現されているだけです。これは当時の倭人(日本人)が中国の図像の意味を理解していなかったことの現れです。しかし表現は決して下手ではありません。意味が分からないままに一定の美意識をもって作られているのです。周縁の文様も納めきれずに反対の鏡面側にまわしているので、後漢の方格規矩鏡とは印象がずいぶん異なります。その独自性にも興味を覚えます。

(企画室長 宮川禎一)